

前回、私たちは〈小さな死（別れ）〉を経験しながら、人間として成長していくのだということを書きました。きょうは、ミツの生涯が吉岡に、そして私たちに遺した〈痕跡〉について考えていきましょう。

これまで「森田ミツ」というひとりの女性の人生をたどってきました。みなさんはミツに対してどんな印象を持ったでしょうか。

彼女の幼いこどものような純真さとやさしさに、ときには「そこまでしなくても …」と、お人好しすぎる性格に呆れかえったりしませんでしたか。「そんなことしてたら、世の中、渡っていけねえよ」と、その世間知らずで素直すぎる性格に歯がゆさを感じた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。もし、ミツに人並みの常識や打算的な意識があれば、あのような人生を送らずに済んだのかもしれない。

しかし、決して〈しあわせ〉だったとは言えないミツの人生が、彼女を捨てた吉岡に、
『もし、ミツがぼくに何か教えたとするならば、それは、ぼくらの人生をたった一度でも横切るものは、そこに消すことのできぬ痕跡を残すということなのか。…』と、思わせたのはなぜでしょう。また、彼女の生き方が小説を読んだ私たちに〈何か大切なもの〉を訴えてくるのはどうしてでしょう …。

《苦しみへの共感 … 『運命の連帯感』》

『わたしが・棄てた・女』巻末の「解説」を書いた武田友壽氏は〈運命の連帯感〉という言葉でミツの人生を貫いていたものを説明しています。（この「解説」はぜひ、じっくりお読みください！）

（夜勤で手にした千円を、田口さんの奥さんにやった話 ～第10、11回参照～ を引用した後）

『ミツは《くたびれた顔》の主（ぬし）の声に従って我執を超える。（中略） 彼女はそのとき、無意識のうちに〈愛〉の行為を生きているのだ。そしてその〈愛〉とは、くたびれた顔の主が彼女に囁く、《この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ》ということなのである。まさしくこれは〈運命の連帯感〉にほかならない。』

私たちは、ミツの一生のほとんどが〈他者のために尽くした人生〉だったことを知りました。父親と新しい母の生活のジャマになるのではと思い、家を出て働いたこと。残業して得たお金を、他人の奥さんに差し出したこと。小児麻痺の影響で女性にモテなかったという吉岡のウソを信じ、その寂しさを少しでも和らげようとして、愛情を注いだこと。ハンセン病の診断が誤診とわかって、患者さんたちと一緒に生きる道を選んだこと ―。彼女は、自分のやりたいことを我慢してでも、目の前の〈他者〉のために多くの〈自分の時間〉を与えました。おそらく現代人がいちばん選択しない人生です。ほとんどの人たちが「できれば回避したい」と思っている生き方です。〈他者〉より〈自分〉優先の人生は、はたして本当に〈しあわせ〉をもたらしてくれるのでしょうか？

『求める者には与えなさい』

みなさんの中にはつぎのようなイエスの言葉を読んだことがある方がいらっしゃるかもしれません。

『あなたがたも聞いているとおり、「目には目を、歯には歯を」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬も向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。(中略) 求める者には与えなさい。』(『マタイ』 5章 38~40 節)

初めてこの箇所を読んだひとは誰でも「おいおい、何言ってるの?」と呆れかえるか、憤慨するのではないのでしょうか。あるいは「そんなこと、できるはずないよ」と『聖書』を閉じてしまう方もいるかもしれません。この聖句を文字通り受け止めてしまうと、そういうことになってしまいます。

『悪人』と『ろくでなし』

私たちは「悪人」という言葉から、殺人・強盗など、すごく悪いことをした者(犯罪者)を思いうかべがちです。そんな人に「与えなさい」と言われても、できるはずはありません。

しかし、山浦玄嗣先生のケセン語訳では『ろくでなしの馬鹿者』となっています。(『ろくでなしの馬鹿者にはまともに抗うな。』) この訳なら、「こいつは、今はどうしようもない。でもいつか、何かのキッカケで目覚めて、立ち直ってくれるかも …」と思える相手として、考えることができますか。それならイエスの求める行為をするのは、「まったく不可能ではないかもしれない …」と(わずかではありますが)思えるのではないのでしょうか。「犯罪者」という意味だけで解釈すると、イエスの真意はくみ取れないのです。翻訳者は原語にあたり、いくつかある意味からどれを選択すればいいのかを十分考慮しなければなりません。ムズカシイ仕事ですね。

また、大切なのはこの箇所を読んですぐに『聖書』を閉じてはならないことです。次のイエスの言葉が続きます。

『あなたがたも聞いているとおり、「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるうか。徴税人(注①)でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるうか。異邦人(注②)でさえ、同じことをしているではないか。』(5章 43~47 節)

(注①「徴税人」：徴税人の中にはローマ帝国の権威を嵩に着て、必要以上の税金を取りたてて私腹を肥やす者もあり、当時の社会では爪はじきにされていました。 注②「異邦人」：異教徒、外国人)

第20回で書きました「汝の敵を愛せよ」の箇所です。ケセン語訳で下線部を読んでもみると、

『敵といえどもどこまでも大事にし続けろ。さらにはだ、自分をさいなむ者のために何かよいことをしてやりたいものですが、何をしてやったらよいでしょうかと、神さまのお声に心の耳を澄まし続けろ。そうやって、天の父(とと)さまのいとし子になれ。』となります。自分を責め立て、いじめ、苦しめる人間に、よいことをしなさいとイエスは語ります。私たちが神さまの「いとしい子ども」になるためだ — と言います。

〈自分の時間を他者に差し出す〉

人を〈愛する〉とは、人を〈大事にすること〉です。私たち一人ひとりの〈いのち〉は、神様が与えてくださったからです。出会った人に、わたしと同じ〈いのち〉を感じることで、その人がいい人であるか、わるい人であるかなど問題ではありません。『父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる』のです。神にとってすべての人たちが大事なのです。だから「自分を苦しめる者」や「他者」のために祈りなさいと、イエスは言います。

ミツは会社の田口さんが「大嫌い」でした。でも、その奥さんが幼い子どもの給食費も払えないようすを見て、いてもたってもいられなくなりました。「何とかしてあげたい」、「助けてあげたい」…。あのサマリア人と同じ気持ちになったのです。残業してかせいだお金で、自分のカーディガンと吉岡さんへの贈りものを買おうと思っていたけれど、「今、この人を助けてあげられるのは私だけだから…」というミツの〈他者への眼差し〉。そして、《この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ》と言う〈くたびれた顔〉の囁きを聴き取る〈こころの耳〉。まさに彼女は『神さまのお声に心の耳を澄まし続け』た女性だったのです。

ミツは、「自分の時間」を他者のために差し出すことができた女性でした。カーディガンと贈りものは買えませんでした。でも、ミツは生きていくうえで大切なものを神様からいただいたのではないのでしょうか。〈差し出す〉ことで〈得た〉のです！

この連載をこの1か月半ほどHPに掲載できませんでした。じつは、孫たちが風邪をひいたり入院したりで時間を取られ、精神的・体力的にパソコンに向かう気力が出ませんでした。でも不思議なことに「孫のせいでできなかった…」とは一度も思いませんでした。孫たちは、成長したらジィ・バァが世話してくれたことなど忘れてしまうでしょう。それでもかまいません。なぜなら、彼らの成長に深く関わることができ、たくさんの微笑みという〈たからもの〉をもらうからです。「孫だからできるのだ」という人がいるかもしれません。しかし、「他者に仕える」ことが多くの労苦以上の〈よろこび〉をもたらす — と知った人間は、目の前にいる人の〈隣人〉になれるはずです。

『ぼくらの人生をたった一度でも横切るものは、そこに消すことのできぬ痕跡を残すのか』… 回心への〈鍵〉を吉岡にもたらしたのは、ミツの〈他者に仕える人生〉だったのです。その鍵を使うか使わないかは、吉岡にかかっています。次号まで。

【引用・参考にした書籍】 ・遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』

・武田友壽 『解説』(『わたしが・棄てた・女』巻末)

・山浦玄嗣『ガリラヤのイエシュー』 ・日本聖書協会 『聖書 新共同訳』